

大教大付幼稚園 親子で昼ご飯

## 手作り給食 パパ奮闘

園児の給食を母親が手作りする取り組みを70年以上続けている大阪教育大付属幼稚園(大阪市平野区)で、日頃とは変わって父親が調理した給食が振る舞われた。子供たちの期待を背に、四苦八苦しながら奮闘する父親たちに、「頑張って」と声援が飛んでいた。

給食室に集まった「お父さんシェフ」は、白い給食帽とエプロン姿の12人。手慣れた様子で調理する人もいたが、包丁をもちながら困惑した表情をみせる人も。給食室はガラス張りで、外の通路から園児たちが「あれ、パパだよ」と満面の笑みを見せながら調理の様子を見つめていた。



④ 白衣姿で調理する男性保護者ら

⑤ 調理した給食を家族と食べる父親たち  
—いずれも大阪市平野区の大教大付属幼稚園 (寺口純平撮影)

父親たちは1時間半ほどかけて、中華ちまきとおすまし、リンゴゼリーを調理。出来上がった給食は園児と保護者に振る舞われた。調理に参加した大阪府八尾市の町田晴信さん(40)は「これを機に作ろうという父親が増えるかも」と話していた。

同園の手作り給食は昭和23年、戦後直後の困窮で十分な食事を取れない子供たちに「できたての温かいものを食べさせてやりたい」と保護者たちが味噌汁を提供したことをきっかけに始まり、71年間にわたり続いているという。

現在は弁当日と午前保育日を除く週3回の給食を全保護者が日替わりで10人ほど集まり手作りをしている。小池美里副園長は「保護者が手作りする事で、作り手の顔が見え、苦手なものも頑張って食べようとするなど、食育の面でも良い効果がある」と話す。

最近では、仕事を持つ母親が増え、給食作りの当番に参加する父親も増えてきたという。

父親だけの給食作りを提案した西田純さん(37)は「そこを覚えて父親だけでやることで、子供たちに性別は関係ないと伝えたい」と話していた。